

株式会社インタラクティブィ 番組審議委員会議事録

1. 開催日時： 令和6年10月15日（火） 13時00分～15時00分

2. 開催場所： 株式会社ジュピターテレコム会議室 3階 Room1 会議室

3. 委員の出席：

委員総数： 7名

出席委員数： 7名

出席委員の氏名：

（敬称略、五十音順）

植田 益朗、音 好宏、片山 哲郎、砂川 浩慶、村上 憲一、中川 幸美、吉岡 忍

放送事業者側出席者：

株式会社インタラクティブィ

代表取締役社長

取締役

笹島 一樹

高木 明夫

株式会社 エー・ティー・エックス<アニメシアターX>

CH 事業部長

コンテンツ事業部長

佐野 圭介

安井 大祐

ディスカバリージャパン株式会社<ムービープラス>

取締役

林田 真由

ディスカバリージャパン株式会社

編成企画部 部長

伊妻 顕子

ディスカバリージャパン株式会社

編成企画部 アシスタントマネージャー

志賀 可奈子

事務局：

JCOM 株式会社

メディア事業推進部 鳥居 修平、斉藤 弘之、水野 唯音、廣田 結子

4. 議題

株式会社インタラクティブィで放送する6チャンネルの内、「アニメシアターX」、「ムービープラス」の番組内容、編成内容について。

5. 審議内容

- ① 「アニメシアターX」の編成およびオリジナル番組『R 指定アニメ!』について、各委員より以下のような意見・質問がなされた。

- ・事前に対象アニメの情報が無いと、トーク内容が理解できず、番組を評価するのが難しかった。トーク内に出てくるエピソードを聞くと本編を見たいくなるため、トークテーマに沿った本編の集約映像などがあるとより親切である。また、後半に登場したお勧めシーンを対象ドラマの一举放送直後に入れ替えるなど、生放送を活かす番組構成の工夫がほしかった。

- ・トークしているスタジオの背景がシンプルなため、アニメのポイントなどが分かるような説明や画像にすべきだと感じた。スタジオ演出の工夫でもっとコア視聴者の満足度を上げられるのではないかな。

- ・アニメ自体はシリアスで非常に重たいテーマで、大状況を語っているのに対し、スタジオトークではそのテーマには触れず、アニメのストーリーや描写の感想のみになっている点に疑問を持った。アニメ専門チャンネルとして視聴者の満足度向上を狙った番組としては、内容がアニメの感想だけだと少々乏しく見えた。また、アニメの一举放送を受けてのトークに熱量がなく、本編の余韻が感じられなかった。一方で出演者の言葉選びやコメントのタイミングは魅力を感じた。

- ・コアなアニメファンに向けた番組として、アニメを好きな人が好きな作品について出演声優と自由にトークするという構成は良いが、ライトユーザーは入りにくいのではないかな。

- ・アニメ専門チャンネルとして、今後はターゲットの年齢層を下に広げて裾野を広げていくべきと考える。

<事業者回答>

『R 指定アニメ!』は、司会のタレントが指定するアニメという意味であり、アニメの一举放送が終わった後に司会者の視点や視聴者の視点を紹介する番組である。

作品のストーリーや描写に向き合う番組、作品を楽しむ番組と位置付けているため、その内容を中心にトークするように心がけている。今後は背景の種類やトーク内容など、より磨きをかけていきたい。主なターゲット層であるコアなアニメファンとは、アニメ好きの50～60代、子どもの頃から生活にアニメが溢れている30～40代を想定している。最近ではオシャレな嗜好としてのアニメ、という位置づけもある。このようなコアなアニメファンに向けた番組を制作しているが、番組によってはライトユーザーに向けたつくりになっているものも制作している。

② 「ムービープラス」の編成番組『ローマの休日【4K】』について、各委員より以下のような意見・質問がなされた。

・ムービープラスは広い視聴者層を持っているため、初めて「ローマの休日」を見る若者向けにキャスト・時代背景の説明や、【モノクロ映画の見方】を解説するとより良いのではないか。配信との差別化として、企画力や見せ方が重要になる。

・主要な配信サイトでもオードリー・ヘプバーンは見られるが、他放送局はオードリー・ヘプバーンをチャンネルキャラクターのようにアピールしていた。ムービープラス 35 周年特別企画としてのメッセージ、核になるものはロングレンジで提供していくべきではないか。

・映画リサーチ社によると、コロナ前後で比較すると映画館で映画を観る「映画参加者人口」が約 800 万人減少している。映画を観るために若者は映画館を選び、シニア層は配信を選ぶ傾向にあり、ボリュームゾーンのみドル層の映画離れが進んでいるという結果が出ている。映画専門チャンネルの使命は映画人口を増やすことではないのか。今回の企画にそのような要素は盛り込まれているのか。

・35 周年特別企画のテーマのひとつ【MEMORIES－あの頃の記憶】について、古い映画は過去のその時々情景を思い出すことができ良いものだと思う。また、戦後 8 年ほどしか経過していない時期に撮影されたのに、映っている街に戦争の爪痕が残っていないことなど、改めて見ることで新たな発見があった。当時の映画の制作背景など気になる点などを色々調べたりして振り返る行為が楽しかった。

・4K だと音声映像共にクリアに観られたことで、心の動きまでよく読み取ることができた。

・声優による番組ナビゲーションがわかりやすく好感を持てた。本編終了後に再び登場しないのは作品の余韻を残すためと推測した。

<事業者回答>

映画は配信含め、様々なウィンドウで提供されており、ムービープラスだけで見られるものの提供は難しい。しかし、これまで視聴していないであろう旧作の視聴体験という価値を提供している。

今回は 4K 版の魅力というこれまでの見方とは違った新しい気づきを頂いてよかった。

ミニシアター系映画は公開本数も減っており、映画公開時に大きく展開するものしか上映できなくなっている。ムービープラスならではのアピールとしては、編成の工夫で視聴者の方に新たな発見をしていただきたいと感じている。

以上